新撰菟玖波集

雜 一ヨリ四

へ5
1130
4

新撰菟玖波集巻第十二

雑連歌一

ちかけれとも遠く見えもうちはれて

後三條入道前左大臣

春たちぬ月になかなかかくれなき

冬りにもかすむほのめく山

御製

春来ぬとおもふ心や霞むらん

世をわたれこそ年やこえぬる

利
1130
4

前左大臣

きけハけさこゑのなかきをは川

舟まくるたちはれおもかけもなし

權大僧都心敬

花みつゝ雪をかさねて身ハ老て

ちるハたちれの何ましいらし

宗祇法師

身をいたつらにすてこそ老のきて

文明十八年三月廿五日内裏にて百韻

此まてかな

ゆくく此わか葉なひくかさゝ掻

前大納言卿

山はなの花にはかたる日はみえて

かねひゝきをかくさけるたつさ

能阿法師

そふきての雨ハ霰れまの朝日かけ

わか帰る浜しるとこそさえ流る

權大僧都心敬

誰かへしこすゑにかすむらん
めつらしと見るは梅の匂ひそふる
宗祇法師

きのふまて雪と見し色のうすかすみ
のこる気色もあさき花の色
宗柳法師

ふるをいとゝせはかすむいそやま
ちりぬとも風にはみせし山桜
正徹法師

このもとに木ねのかさ谷川のみつ
たえまちかやなほきえふるたのむ
源盛卿

石はしは水は霞にうもれて
流るゝ音もきこえてめまこす
法眼専順

ゆふこ山の霞の晴したちかすゝ
きてみよと花ちるかたの家ゝきけ
宗元法師

やよひ山みのたくれなるてし
さらにかくまてそめしまれ花
ちらんはし
かすむよやし濃ふてのうすまくら
志らふとてちるはなかはのこらん
関白右大臣
はるをてね世をうらひ乃吉小将て
はるなる花はとこう月もはなはなめや
三品親王

こゑひとはちへたはれぬうくひす
ちる花はとはぬこそあはれなりけれ
権大納言実隆
うつるやいろはなほなれうくひす
梅の香きくる雪乃したうつ
能阿法師
月よりはしたる乃霜けさいてて
とこしなくれうすゆきれみち
肖柏法師

ほめくる聲も竹のはにむすふえて
そのゝすゝしのふしならん

宗任法師

もしほやくあまのさへつりなかめて
芦屋白ら清なかれ百韻乃連歌
野はわか草にすきを風そ許す

藤原長泰

弱りゆくふみつゝ乃みまかれ君さけて
婦る庵しらぬ梅白ふて縁

權大納言心敬

君なすきひくこれ志のふけきり春え
家たちはひら山の桜か花ちりく

多々良政弘

こまかにすきまきの春のゆき
むくむし柳の波はいろて

惟宗氏弘

むめかゝ小鳥の袖ふくもはなあらし
一 たちわかるなやみつにかふらん

宗般法師

玉しはや川の瀬ゆくもみちはにて
志らぬ名も花をも芳野の山こえて

了孝法師

たつあかね柳やらつなきまゝ
大かまてハゆりねみつにも雪経て

法橋尚存

まちらるゝひかりはかけを月かけ
風よりさそふ松の葉るまきハらし

摂大僧都心敬

このまよりゆくへのしらぬの月
さしはかりさハ山はられたる

多く良政弘福信

まいまいこさらぬ月すみ雨おもて
霧まそほしわかれまへ白の中よ
たかひらへもえ風にさき世の中

前関白右大臣 忠策

志るみちを花よりちつくのまあや

花よしハのちれたるもてのまん

入道前右大臣

身のほともおもへはいとゞ花をみて
いとまて百韻乃連歌ニ
こゝろはよくも思ふらん○

関白右大臣

ちるまてはなとりてはすしいたらて
こゝろにおもひかりしつゝも香

御製

わかれもぬ山ちかきたかのうらも
いくはれたふうちひきさらん
花はらんたれもとにその庭はらひな
老乃身しハかんかあらもなし

太政大臣

ちるまてよりさしそふわかれまそきて
○又京月はそふたるをはてける

蓮阿法師

山さくらくるゝ○てみもいへをとなし

一　鳥もえやさへ侍るかたにかなかりゆきう

源友貞

たまよりあくる志乃ゝめおもろし

いて侍る河とをうらまてをまつ

法眼紹永

花すけり山はむかひ乃渡し船

待くらする橋本のこのけ

法橋兼哉

源山彼はまさ〇の戸そきてまよひく

何をれて我ひまつふかゝらん

源持知

人志まね谷の埋木落ぬらし

こゆるそあまきお坂の里

よそ人志らぬ

人ゆるふきらしつ戸のゆふ日かけ

山のさらしに法ひそきく

宗長法師

一　千よ日も暮ねへしるとつなく

誘ハれし山といひまて經るゝや
大江重広
老らく安んハ人のみる何のをと
うき世を未をくやかひあれなの山さと
よそ人志らし
ことゝふもたゝうの世のかけ清き
ゆりのとあけにはたゝ谷をれしまれ
藤原長清
みな分記ゝハり坂續いそう乃風まさる

おもハぬ夢はゆくかれをそらき
荒木田守晨
風ならはちらぬいは花にかへきん
なかなかにおもふは志らぬこそ經れ
宗恐法師
古今もうき世にうらもなかるらん
とはれさりけるやこゝれ雲もらぬや
頓阿法師
古里の志らきくら志かみの花咲く

とはまんかの山かけれたは

贈従三位敬弘

花の香も世はかすかぬ風ぞしめて
木すゑも人のこゝみとそなは

源秀滿

むかしおもひて頃も花もまたきて
風まちひのわかまたなかることそなる

思撰法師

うへしんかひし花も咲たなきや

あんかみうしとおのふかかしよ

智蘊法師

いはまそへわかりすみれたかのまき
あらましふさにら友からしまます

藤原利縄

たかみかゆけん中内かをそそふく
なにてひぬるふうしえたちきう

藤原氏貞

出
わりたしむ花とやの猿もさそふらん

一 わきもこて縁と志ほかてやらん

玄清法師

おもひけれはもりたちそふ山下風

うらはしきハこゝろ縁ありけ里

よみ人志らす

はしもなき分ちはをされはいそくらん

芝はしめて庭ふのこすゑ松の路

藤原元親

たかこゝろあるへめつかし人もなし

夕くれは心しひとりかくて了忍

藤原能秀

とほき野乃わかえれ河さちこの世傍え（芝生イ）

花はて縁松原すり日そえてる庵

宗砌法師

青草のうしろ風ふかき流く

ちまたはまかさへつるゝけもなし

ちうん法し

海いさや家をわするゝ花の世にて

一 たかはらかしやまさくらもさかりしか

藤原基春朝臣

今日そみね山ぢはかれぬよふことり
かれみもみてねきての何さつ遊

三品親王

春ふかみたえぬ花のころまちまたれ
むかしなる山はさらにさくらめく

式部卿邦高親王

古今のめのぬかうま　清芳野のたく

わきみはとても花やさくらん

宗澄法師

鳥そなくかをる山花の色なれや
柳はしつれめしまなきまとふ緑

平章株

あてなくは春れふる里ふくみなや
浪かいの花の末は浪のかのまん

法眼専順

すみためりそめりやもふ山の寂え

一 きれわたる岳の麓よりもゆき

法印公意

なきぬなにもうつまつり岳は夏はなくて
ひさしきはけふるをしはまのすず

素安法師

くもかかる(?)やまはのそのたにのさつまるる
ひとしれずて袖をしぼらかく

法橋兼載

みもなき(?)ぬれるさをしは神まつる

むしさえに庭のしならみはれ

宗砌法師

うちはえてはつしハりしれはて
うきこあつ涼しさをいてをもなに

宗長法師

郭公たいそれとうりきすてて
身を捨りしなれひとのぬきまし

法眼専順

座ま田小さなるもとうくへたつまえ

一しらきやさてともなりのかけならし
関白右大臣
うらみともつくしは世をうらひふ○
いつ日もとゆきこゝろはてしさ
慈照院入道贈大政臣
夕たちは峰まつさきにかゝる風して
たえちらふきこえすけれとふる○
禅益政
しけりそのもとにすむせみのこゑ

雲のほかはなれなかそらのゆふへ
よみ人しらす
まとゐしもむしのねかれてぬすみ秋よ
しなひくのうき法をつま
前中納言公敦
かつ蝉乃たえやまゝにれを旅たちて
むれふの袖のつゆけしたま
多々良政弘
世のうきをなかふそらに秋乃来て

ほしもあへぬせにはらそふ秋しき

贈従二位教弘

わかまちぬ秋のたつ露けき宿て
うちぬるほとも旅ありさまや

法橋専順

あらしあひをおもたぬ月もみしよに
ゐぬかくされわかれのあきこゝろ

智蘊法師

めかさてぬる夢路乃うちもれ露はおちて

夕くれはうきをたのむひと籬哉

源政宣

萩ありきさらぬもなき秋のかき
りに花まてはえぬつ遊乃月

能阿法師

花ありきさけそらのうけなる蝶乃草
こゝ絵もまてしつ遊そこに家

多久阿

月しろききまつにもをかり虫鳴て

一 ゆるさぬやこいたく秋のよ也

宗祇法師

木葉ちるは木すゑの月のしはしかな
ましこぬれ乃枝のちるかな

権大僧都心敬

志ら露ちるは柳や庭をさそふらん
こゝろさくひかりは晴るよには

おもひの月を二日のちる小みそ
ゆふ帰るかたにつ近けれゆふされ

藤原正存

むらさめのつゆもや月もまちつらん
丹波路やこえゆくのけをすみそむ

能阿法師

月まちる袖つむむら雲のはるゝ
きえてものこは雪乃おもかけ

真阿法師

ひむろ山嶺はきえつゝ月ありこそ

一 内裏にて三代集の作者をこめ侍り

連歌に ふえ竹のならひしもの山風
参議基綱
まつのかるをひとりみて月出て
谷乃こゑわきてわきたちさはけき
法印治助
ゆくほとを志るやふりつゝ秋乃月
さしのほりぬきこよひそなかめ
玄意法師
松の梢より野寺の月をひとりみて
さゝれは母きこいの杉のかねのつゝ
参議持世朝臣
はれたるのきに秋の袖の月の影を
風の鹿そふかはの梢の杉
よみ人志らす
むら雲のかけたる月の秋はあけて
露はまつわかるも風のをちかたに
宗祇法師
やまかたみのまつはうつしふきぬ

夕は雲しろき山のしたみち
法印行助

笹のはにこほる月やうつるらん
こゝ経なをさかへ老のこゝの杖
能阿法師

萩にしほれてにけり月をみて
雲井はいはしらうのなかき夜
法眼専順

ふかき霞の月はみしなすさけさえ

萩にしかきをよ新に何しれ
宗長法師

西の露をわけ月のおとりやつるらん
行ゝなにや浦をいてこゆらん
宗祇法師

ましみちるとこ縄もちつね月はまて
かゝるのかなるゝすきちのやま
池坊上人

くもゐ萩はめくくもちてつくる月かな

うらおもしなるちきりたのめや

前関白 家凞

さそひつるさへ波も月にもさそし

かく後ともわかすめし物かなや

前左大臣

はしめいは津そあき乃ゆふくれ

松からぬ雁の世よふくて波ならん

宗御法師

うゑし梅の様もゆふくれなれて恋

夕霧のの花の陰しすゝふらし氣

藤原能秀

まりな以後かきゝ梅の様そふく

菊いおかをまゝ明るみしらぬ夜

三品親王

みたれそ浦まて月も夜のまころ

しほるそくも袖そおくし露

後花園院御製

秋のこの我世をも更て月をとみんく

こゝろをつくす秋もきにけり
後京極入道前大臣

おしめ月山の端をいでゝよりあひ
蓮の臺をまつの國
多々良政弘朝臣

人の世のにごりに志づまぬ月をみて
こゝろのうちもきよきをぞしる
宗祇法師

濁れ月もしばしのへだてよしの秋
野をこえし枯野は露をさびしき
三条西実隆

跡の川秋の夜ふかきまくらかな

みるこゝろちぐさの影もくもらじな月
源通具卿

ぬるはたゞみなみの山の秋のそら
我がこゝろ影をわすれてもやしれ
紀光信

なみゆへたつゝさとも南は嵐のそら
老ぬれば何をか月もとゞめけり
宗伊法師

風はたゞなびくしの山の旅法師

くりこな袖にしおもひけるとき

智蘊法師

世の中を嫌ぬ野山のたくひや

身をも法るんによふたゝなからふへし

法眼専順

よりひ乃す忘れあさのゆふくれ

春りまつ絵よりみつれ月まて

書海法師

もみち地はしらあさき乃夜まては

狭は法めいくたなみゝ身ありしむ袖の上

按大納言日台

わかよ秋のや雨に志くれて

ふり草や里をわけし旅ことに

智蘊法師

身をなしみや雨に志くれて

庵は法母そたゝるあめまつよりく

源政弼朝臣

ふれかすむ木の葉うつろふかゝる時雨

月さえしとやちとせあくらん

権大納言忠教

霜志ろ袖のかりしと色の秋の

うき事もうらしきこゝろ定き

宗祇法師

河しものよりてそれるの世の中

雲あらし内やものこゝろん

宗長法師

なか花のしぬ浪ちとらゆきかへり

志ハし志くれはくもにかくれたる

法眼専順

霜深きうき野の山の雪かな

うつろふ宗河の法をふく秋かせ

よるの志くれに

小夜ちとり河のほとりにたつゆき

河しもかく雲にゆく小舟きえ

権大納言実隆

あまりけちらす雪のとなやま

さゆるよの月ハおのへよりけさみえて

法眼禅豫

音ちる海よりやま松嵐すさひ
山まハ月をのこしつれはなみのこゑ

法橋益栽

音はかはしものはなくれむしたち
さけ乃春にさけは河瀬の花ちる

権大僧都秀順

猶ね根にてたるゆきふれしたひ

新撰菟玖波集巻第十六

雑連歌二

千句の連歌の中に

きくすやふりみれる人なあらしは

宗伊法師

海山のをちこちなひく山は雲はれて

浮き波たかきみちいろくも雲の船

入道前右大臣

風をもりくもちそ海よふけむ

妻とふ鹿ぞこゑそやふけり

権大僧都心敬

うつさこゑや松のおのえの嵐もちて

みゆるひかな袖は志つとも

宗般法師

あはれ風のこゑもさだめかねたる

老てみゆきこそあやうけれ

宗祇法師

いにしへの世はしたの山の小松かな

なかとなくなくこふむる朧雲
源友貞
くもれはさてりのこるやまのへ
夕もやハつ越を渉してあをかし
よみ人志らす
あはたの山のところれしくも雲
あしハすそかくもはなかなれ
多々良政弘朝臣
くもよりくへいりしくきたかひこ

おもひけるころ坐ぬまかりきさて
法眼宗順
大ひさしくつきぬ我ぬしれ縁
文明十三年九月十三夜内裏にて詠
連歌に　雪や山にはつきて見る
参議基綱
見やここよりとはなさしつたふかなまや
同十四年十一月廿五日内連歌に
いつくにそかふも加のかたつめそれ

御製

うつろ色なる露まふかしれ旅
いはほれ山定におもよりはなこし

按大納言宣胤

むかふちる空もりとぬきにしける
とおもくそのころやまれ春の雪

忍しゆん法し

みやこまておもはゝ家のかけ
うき日一ときふ世乃中

能阿法師

いつもていたかさき松原よし野山
何しそはらふこゝ乃ちまの雲

前右大臣

ある日みゆめしなするや海のおもかれて
かそくそこゝゆ味なたこふみち

慈照院入道贈太政大臣

やまはひかきのもの乃ひきはなうへた
大井かりのこゝほともかりさ

参議基家

山のはのかけしはなれてにすゝしも
やまのはりこひのしきさはのかけとこそ

法眼専順

うつゝをやいまねかけりあけわたら
きこふむしのこゑぬはほのかし

よみ人しらず

みつかりて春はたなしのりしら
いろゝかえて庭まてこそ娘

三品親王

君のよのかさたなかれくそりこの萩も
冬の千毛雁ハ小たひし色見えて

権大僧都心敬

ゆふ日かけしたゝのみつ法つすち
河しさのえり浪なれる毛り

肖柏法師

いつる日のかけにし白ふかれなれけ
たゝひとゝもなまつちてきゝけ

御製

かしこしやはる見えしよゝの御代に
我こしまき露乃ゆかりをたのむさき

参議重治

おもひけりひらけしよゝのうすくもる
いろあるまゝのまのはるかなる

宗長法師

いかにせんあらしふきちらすはなのあとを
ちいさきなをはおもかけみえたる

法印玄陳

雲雨よりとほきまちてかはおほけれ
ひとりもえぬるの中に
えんこうはまた柳をふきはなかけて

権大納言実陰

いまさらにこゝろをわくるしきしまの
なにはすみよしてみつれく

大僧都慈運

さえわたれは舟のよはゆきけるもかし

たかゝめ屋るなきの山松風そよき

藤原正経

うしすとふ江乃游れゆふあさ
ふ称て詠せよかきりなき代

藤原政行朝臣

ちはりなるたきころもふる雲にゝ
かしてま海の世ゝあるみ徒

関白右大臣

こゝろ小みいふせりの雲のかゝ嶋子

文明十四六月久し物語のたまへ
まへはしまいひらく連歌に
待つ里舟乃今すゝたらは浜於く

御製

子てりしりまし阿まのさえほつま
きゝもみぬみふもかまてよ浪の音

権大納言実隆

ゆふへ乃そらのうり世のほつれ称
代ゝ徐そ れしきゝ唇のみつく

權大納言忠敎

ふかきくもさかとはすかく枕のこゝ
秋乃まのゆめや乃とゝたゆるらん

後成恩寺入道関白

いさり火の影もあらはれてこく舟よ
えしもきえしはすゑそたえなる

法印宗海

明る江のいさりひとゝもてなかれ
つきみえふかくてらす波のうへ

法橋兼載

ゆふされは猶さたかなるいさり火や
こと浦かけてありあけのこゝ

權大納言忠敎

夜をこめて此釣のもとよりすなとりし
せいきたゝしかくてつなまれゆく

智蘊法師

大海のとほきしほひのはてにしも
まつかすまたゝるゝ風るらしな

りしこそやおほうみのつるめをわすられて
いはまうたれみきはにはすむ
多々良政弘朝臣
なにははほりえもむかしとこそやしのふらん
よしあしのなにはすみもたえにけり
玄澄法師
いにしへはたえやたかふあふはのこゝろこそ人
慈照院入道贈太政大臣家にて百韻に
りんかうさへこしや一筆もあく

宗祇法師
くもゐるまはうら浦しほあるきて
袖さへぬるゝみちしほのそら
宗砌法師
いにしへの宮はあれのゝしもきえて
むらかれふきもくさねは松風よ
法橋兼載
志井れをふかくしりの松のねるつるや
ゆのしよるくるいまさつもしはしなし

源尚純

いしふのこゑするやしかなほこゝや
文明十六三月尽まて残るつゝはなの紅
こゝろなき　慈照院入道贈太政大臣

大井川かはよりたちのほとゝゝりて
名されは月の影さへ月にしみて

能阿法師

はらハむしれぬ草のつ枝
あのふといふをもなほさらるゝ

宗祇法師

こよひさへたのめかれし花もかなれ
わすれぬやたれもたれなかるゝ

権大納言宣胤

ありたなる志のふさとの名をきゝて
かほにはゆくしらまつのこゑし

三品親王

星よ淋き夕かれをちハすこえすそ
とらふかるより袖ハつゆけし

妙花寺前関白左大臣

梅る里ハくもきえてもこふたゝひかへり
あくれハ雲やへちわるらん

宗祇法師

かへりこし月をもらし清うらけ
くつまこそよりし出したひゆく

源意法師

梅をつゝ月ひとつ清まふる清くに
けふかたや河をれすゑらし法大乃

藤原總忠

梅るゝ清ゝひとを山清りとはゝや
わ山乃ゝ志ふもしらしやゝる

法橋昌琢

古さとの匂ひなつはあまる松乃風

文明十八年十一月廿五日いろはの
文字をかしらにをきて百韻の連歌を
ぬきて月次しむつ殊にまもて

梅霊使浚量

るいもあかぬるはなはひしをのこれ
ろ手なりてさそふあらしはけさ

妙花寺前関白太臣

山のけはそれはよくまてこふる雨かな
いなたみの秋はなきてたちほけき

権大僧都心敬

ぬる雨はれ行しのゝ嶺はのこるともて
あやのふはまたぬ風まかりした露

宗長法師

そまとかねたまする霧ぬる草ぬれとま
うちなりもまたはとふこれもあし

宗祇法師

たれのたむ花よりたまはれ草の露
世中乃秋よりおれのかへ雁まし

宗碩法師

すゑしら雲乃わかまし乃やま
あゝ乃かきみちや我ひとれみち

権大僧都心敬

山ふかくかよひしみちの一橋
おもへは雲もうき世なりけり
大僧都慈運

かくれ家とこそ頼めのちもふかきあまたや
あともはるめぬ身ハわすれなり
参議時慶

すみそめし筆にしおもへやまふかく
ことしも花にうつる涙かけ
参議基綱

まいたつ芳野のおくもうき世にて
いかにてやつらきこゝろのなれるらん
権中納言宣親

あきもみぢやれたる庵の中に
志はらなる谷にも松は風ぞ吹
宗砌法師

よのうきによるの山のはしゆき
世中をとひてゆくらん雨よのかきそ
肖柏法師

なかきかけは庭まなしはらふ
かり田のあきれいなのはひしさ
法印頼融
しらけ人とをもはらぬ身のなく
露をはらさねむ老のつきなさ
參議基綱
みしもみし友はまれにしらけは
いつをこよひの月にても涙
前太政大臣

あきしらの月さへはれゆくの夜は
わかれのしたはまされぬらん
法橋兼載
なかきよすむ月もなき影の夜は
こけのたもと袖そつゆけき
前大僧正尊應
まみそめてことし秋ふるころもかな
うきしまいろむしよそに淀世を
太政大臣

やまかせをあらしといふむもしはなれ
ものまことにしてもくもなく

權大納言豊通

何る庭をひらきみえたる志たれをよ
世はうきものといひをたのかし

宗順法師

こよひ乃こころありける紫は
書そむる雲乃たえまに月見えて

法眼専順

こよひは何りし乃むかしなれと
船何もし家志津まりて法乃泉

源意徹

しらぬもみえる冬の雪はれやらし
たえまちかせをまちいるまあひ

小野葉繁

松かきこあの人まつ雪はれもしてさらに
何しまし花をたをるたよ山乃奥

宗意法師

あきてゝもいさやまつのはのいかに
霜とくる池水の池てしもあらし
前大僧正道具

こけむせるしつくの松の松風
ともるをひとのたゝいそらん
権大僧都心敬

ひとりさへなめいし山里に
おもつは世をはすてやらねん
法眼宗順

山ふかくいりしいかにしへ人もこそ
志のふことなきなかなりけん
源友貞

山ふかく住まし山かけ夕なれし
霜ころくつめよへ乃なかりし
権大納言公凱

人もこぬ山かけの秋のいろふかき
山まつふかきつかねのみさく
法橋専存

たくいりひとすむ大原の山
きしさへ見えしあとしなくそく
按察使俊量

人とはぬうき世乃さかひ山里よ
住のこころよ世をといひて
荒木田守武

なかなかにかゝらぬ山はおもしろし
ぬる里人もわれもあはれに
宗祇法師

おもひしるをなかなかこゝの山のおく
奥ふかきこけのしたみちすゑとほく
権大僧都心敬

いねかてにおもひおもふぬるやまはたゝ

新撰菟玖波集巻第十五

雑連歌三

たゝ海を重ぬる庭の山の端

よみ人しらす

いつれまふ樵しも木すゑのかさねて

あはれ百鳥乃出入らす

こゝ海よいくも花をたをりゆく

関白右大臣

うら波はいつ様とはなくちる雪
木と波と人も帰乃山中

多々良政弘朝臣

あさなゝ風をたゝ花のうへ見
消えのこりしこゆる峯のさとの江

藤原元親

うへしより池の心にすむ月を
結事もあらぬけ世と志るかな

平京盛

くもりたるをさのむかしかた
よそ目はえつゝあはれ世とともに

法眼専順

うけさそふかくれはてゝきえかねて
夜絶もやとめぬるまゝなり

宗砌法師

風はらふゆふ山もとのかひもなく
志くれも雪もよそめくらなそく

法眼紹永

ゆきかへり行しハ野のひとつ松

明應元年十月廿三日内裏にて阿弥陀の名号を上字におきて法楽の百首
むかしひをおもへは袖も苔衣に

按大納言よりす

ありしてそたれかいとしの雲
村雨のふりくもとまてしくれん

御製

なかれいるみをしるしや月あかき

文明十四年四月内裏にて百韻の連歌に
かゝる身をすて世をなそまとし

慈照院入道贈太政大臣

世をちきりとて乃みちのほそなくて
またあふとえしらぬ河のわたり山

関白右大臣

花にきてもみちハたちそはなけれ
ときはなるやまのすゑもなし

法橋兼載

花ちらひ梢なからくちたりは
一と世に一たひせめてとへりな
源尚純
もみちの何かしたかふ庭よ錦
きゝなれぬとりのこゑはり山の奥
智蘊法師
谷ともしらすふかき流ときは八十
まてしらね吉野の松をしめときて
よろこひとしらて

吉野の庭にふれる所
なほ消ぬまにこて涙わけぬともかな
多々良政弘
散りつる雨にはまたそれ竹
夕くれなかふく風の音す
權大僧都心敬
世を東なひく田井の竹にたえてき
けふこそのもきくうけしきの出ほし
宗祇法師

おともふらしやまかぜにすすむとも
あせたるいけにみたつるこゆ
宗祇法師
汀なるさゝれのまきかきおちて
井てのわたりのゆきのあけかた
宗砌法師
ひとまぬるさたさ山やちさかし
山ふけめしかとのはみゆ
智蘊法師

かけさすのりもとの本よかけて
月をよはふやこひのふかいかに
前左大臣
津みうしもすゝきしも尾花よりまて
川のおもにもしけしものたちひ
大ゆくかたよりたひのうらそ
くすみなされ松の一しれ
御製
めちとせき涼風またちをぬれ

こゝろなきさくらはさこそしめのよ人

權大納言公敦卿

こゝろもてたのめしひれは忍と鳥なるて
かすみかくるゝ花の浜からも

宗長法師

春の草ふかしとふる野は暮て
くもるそのゆるあつめはちる海
けたとのくらけの雲ぬいと繁き世そ

宗碩法師

志らねこそ数はうくふれひとく

宗祇法師

こよひぬれ山より世をつらきん
ぬさらかしつく人そのむかひかし

法橋兼載

まよふかみせめてはたかうけかって
なとひとことふまよふそちらん

玄清法師

わすれかぬるけやは庭そまよひつゝ

いしれぬ人にも世をそむくとは

權大僧都心敬

みだれ碁に我はまたなにとも

花さかりなるうちに添うけ

宗砌法師

仙人やごろりいまもしるをわすらん

あしたへのこゝろ海渡る乃をめた

よみ人しらず

かさるうこれいさむみちまご

似られもかぬ筆にわけある物を

多々良政弘

みやびをく家の筆やつたへしを

けたよのよにほにうすきをみる

法眼紹永

ゑりあしは家の筆のいきたひ

りしこそさて海ふかうせいこす

源政春

ゑなかくもいてそひ立たりちまれ

おもふらんはこのたえてしよいらせ

左衛門督為廣

乃むあちさけれ忍ひ乃てみしみ
たもへいらもれとも何しらす

多々良政弘朝臣

乃むさけれ乃ちい我のこゝろかそ
あちかゝきまさよの井まもるひゝ

能阿法師

小車をとゞめけぬるうしをひきさくく

あつまそちる乃連歌の中に
されはこそたれもひのいおしむらん

宗祇法師

秋はあけしと思ふ法師のまへ
たれひとやこゝのよにれおなし

宗砌法師

何それおもしろうしれたく法使
こゝろれもとのもいろかはらん
よし人志るとも

何ことゝふ床の起りとねたまへき
きのふもけふもなかきよの夢かたりきく
法橋兼載
たらちねの我や何はかぬらん○
ゆくともしらぬ尾上の松ふかく
宗長法師
光あり火をとりけはひせいに○あらし
何ほどをれの末すまきりて○のれは居
玄道上人
何しれのちる雁かね○のれ春けさ
むらほとる雲乃ゆくゑに雨の日ふ
権大僧都心敬
かの○ひとこそ忍れ守もちの枕にし
ふるきこゝろや昔は神さひにけり
三品親王
とりし火よそめのおもひきえ春かれ
参議雅治
涙とゝむる母そ袖ぬれしこふ涙

ちらひえぬ月ちりかゝる雪に

御製

すゝきありむらのゆふさしとの陰と

書捨とはゝすゝきにたれもなし

妙光寺前関白右大臣

ときこそしたふるこのしたもれん

ゑふとめてやかめしる人さへ世に

千輪院入道前内大臣

あふけはふるしましはれみち

はなむ谷も世にかくれなく旅やまに

宗祇法師

むりあらしれ雲ましこしれは

たのひあらは山をはなれはらかん

法眼専順

いま里ねつきみちを志るしよむしらま

それらみ山ありしもむけをやせん

能阿法師

いゑ乃かきを志たふうつをたなきと見

このむとたらかふことのた
権大納言忠教
まれ生一州さけさとふは乃をしへには
むかしのあとハ草かくれにて
道空法師
めくみさへみすともきあめのしたへく
きこえしそひ神のほしいるかり
権大納言教具
いにしへの松か枝にはたかひもしらぬ代に
標の

いさゝかもかはらぬ世ハなほさかえて
関白右大臣
國やすくすきしみちをのみさ
月にぬるをいろにおもひまし
太政大臣
ふきたへて世にふきおきぬあきの錦
世にぬるゝ事そあさくあからぬる
御製
君かうまてすむハのみ雲ゐにも人
きこえんこともみちふたゝ世に

従一位雅行

もろ人の出いるみはしの袖のうへに
ときさ日をやこゝろにて人のあふらし

権大納言公重隆

なかめつゝしもふらふこの月のみ
うち野ゝいそらちたくより

宗砌法師

うちむれて日よる場乃ひとは名をあけて
それはかり忍をみするたは姫

素阿法師

うき人の語りけるを中津波にこそ
そこともしらぬ海の中みち

法眼専順

ふねつなくたよりにそふれはあらこゝろ
たくたもみえぬかゝみ乃とけき

宗祇法師

山さとにすむ人ならはいのちよそ
かゝるうきよはみよをふませて

智蘊法師

ふそはかゝるやとりひとのあと
忘ぬ色はくちも枯草をたつらく

宗砌法師

られいくたひそまてたのみし
とはれんやさらはみちなれはまむき

法眼専順

これそこのよらしのまさし哉過にし
ゆくやすゑまたし事そあはれ

宗祇法師

ひのあけふときこ日をとれは跡見え
わたしにもたえぬやうあれけてく

法眼宗順

うつりみるもわかはおろかし
すたるは身をやはてぬたすからん

前大僧正増運

そのぬはそれなたふかるいのちまて
たゝかりのはそのぬのみち

宗祇法師

たらちねの名に跡は跡よりおしむらん
跡まするらんハ庭の木末こそのと

攝大僧都心敬

家をおもつそいさむもろくふ
何されぬもおほすむすむさるなきこゝろ跡

藤原種久

子ゆわかれそふハもろくふれみち
こゝ跡ゆらけしほとかえ

宗元法師

りの法ふハ矢さにも名を高あけ法てし
むかし孫なる彦りひろきへや

宗柳法師

いまさひをすはひさよとゝねおほさち
おのが孫ひのりやきみゝし
たか川矢わいて流とゆくさころもえ
ゝ流もきこしもおもひてそかた

智蘊法師

いたつらに春暮してぬる中
としはてたに残けれやとひ嬉ん

能阿法師

おしみかねしたふるたに春杖
人のあききをやたのみしもん

按大納言公宣卿

おもふに暮ぬ時しかも残もて後すて
うしほまんしてこそなりつゝ

三品親王

ちらはちれわかまことしまて梅はなれ
志はしこて後やたのみかしさ

後三條入道前右大臣

たのみまた我はなく春とあらしに身は老て
世をへいはつとみえたおちきり

能阿法師

老はてまし梅いつも世にあらぬ人
かはりたてぬる身てそ残しけれ

前右大臣 實

おひてみる月やあかしのおもひ出よ
みはてつゝに杖をたくらん
宗元法師

老ぬるとめてこし月ふるゝ見えなん
くもたなくはあはれなるらむ此月
前大納言親長

あかぬめやはなにわかれてまつ千とせ
はちまるみちはよそにこそす
智承法師

ひとゝいふてもなしとい絶えぬとそて
この秋も見しみぬや海乃深まひこ
權大僧都心敬

物ことふたつあるかしをかさちのそて
淵たのふこと涙ハされもせを淺し
權大僧都日台

りのちとふ淵ことに絶えつるやまれなん

新撰菟玖波集巻第十六

雑連歌四

文明十六年閏十一月廿五日于内裏
にて百韻の連歌ありし
雨かきくらしふる雪なる空　と云句に

按大納言公敦

清えぬる代々のみちには雨よそな
世ありあかまてしるをかくすさく

法眼兼順

花のちるはなみちもおしからん
菱かしもたえへつゝさえへだゝめん

恵俊法師

世乃なかをさめゑとえてぬいさめしく
こそれぬる袖のかわるゝしき

宗祇法師

うすゝみひとのこゝろもしらぬ山
こたひみさるしたまかふしに

智蘊法師

まひはてもあれはりしこを世にあれは
はかるあらりらんのこすか

藤原正盛

ひとゝなるかめなゝありともいかゝせん
いつまでもありとしもなき世の中

権大僧都心敬

浪さけともそへやなみ袖しもしらん
ほとゝきすの乃こゑ河の上も也

前関白 兼良

ゆふなきよめしいゆふむしかれ
うすきてわかぬるうつ秋の床

従一位富子

はりしておやれいさめとおもふ寄
つゝらしく忘しな袖ぬれそ

清楢無我

いちめれはえへのちりてうし続
めくれあきけそもてあるきな家

藤原為續

いとはなきほとをいさめぬおもかけもあり
おりふしもかはるころひとあはれ

藤原宗蔵

たれかきて志りし親子もなかぬらん
これたゝ縁てそのおもかけなりけり

權大僧都心敬

みよしのやまつにかゝひわたるさと
こゝろもみえたるかゝりけり

法眼紹永

ねぶいうらしさやへとまよはふ
はもりゝは河舟もなきこえぬからん

権大僧都心敬

ひとりのこけをひくをおもしらね
よは捨しておめうき世のならひかな

法印行助

こよひこそ我すみれ見ひしくの庭に
かれはてゝやまもすくはちふかう

宗長法師

ひとまつに宮古をはゝ残さめや
はるかにしてもかへるらん

多々良政弘朝臣

すみなれて思ひなすひとの見るぞ人
わか身もかり御老れ何とれさ

権大僧都心敬

いのちのみまねこゝゑぞよりまさそ
たひの旅こゝいのちかきり

三品親王

こゝろあらはしや宿をみせつらん
月なきハ袖にやとしてもみよ

常信法親王

をのことふかのミ志れり我こゝろ
あくかれてあは雪枝にちらん

多言政公経

ゆきとふめハみえぬ宮のふもとにて
ひとりみる松の月影をあかぬ

道空法師

はるかなる山の雲をあかつきに
よハにあかりゆく雲まより聴

権大僧都心敬

くもとのみいきにはゆまや山のこゝろかな
みきにあけたる松の梢のほとゝきす
よそ人志らて

めさ波すたへてはるとしもなし
みよしのは雪ふる月のこゝる

宗御法師

あけぬまてきのふはあはれなれ
何それのうきはなさき梅か枝

二品親王尊胤

はなの世やゆふへのしほのつきみよ
移りひはきをぬこ移そらさ

御製

あさはまる世にさくさはあらは下
いかりかりのあら移むさそる

太政大臣

かゝる身もまつこ梅かえてぬ世ありすまえ
たていは谷にはなたな杖

兵部卿教國

はるをいはたなひもわかす老ぬきて
かいはうきなうたなはいまたなはな

宗御法師

身をたのむ人は年より老はてゝ
春の日をさくにならん身はつらし

能阿法師

あはれにもねさめてひとのよの中

かくれかはえぬみちをたとりまねかな

前大僧正道興

うき身にはいとゝおもひきふかきまて

ぬるゝ袖もたえぬ夢の中たまや

前中納言雅康

いろもちを地かくす身にそはすれは

なかなかかたはれならぬ身をなほこゝろせを

多々良政弘朝臣

ゆききわかるゝすみゝ花れなかきられ

つねをもたのむおもひの常なきすさひ

権大納言公澄

もろちをあくこひしぬらん夢の中

はるをやみちなれちるとはせん

従二位雅俊

のこりきてやうちにかはる年もかし

ひともなけためにか[illegible]りける

智蘊法師

老てこそ何かれせしも志きしまハむかしよ

文明七年六月因幡にて百韻の

連歌ニ

いひ出ぬわか身はうちのいはねかな

前左大臣

おひのあはれハところもしらし志かのあや

志のふむしやかくらりのこさん

御製

なに事も老ハこゝろのまゝにあらすて

ひとのうへにもうきこそハなし

権中納言宣親

おひぬるハ人にたちまち孫のをひみえ

うつし孫まてのゆくすゑの事

智蘊法師

たゝちよれいさゝめ志て家に身をおもひ

風こそ渡るやあらましひとゝゆめ

宗祇法師

としふれはよはられおひれいふかしく
いつまてつまあたし人にかよはまし
玄清法師
おひぬれはくるゝいにしへの夢
たきつおもちそふまよ涙哉
十輪院入道前内大臣
老ハなかきこそよりこしさのそて 床イ
きしぬいのちもぬれこそなる
よみ人しらす

うつゝとはまさきのむ者ハ老て
うき時ハこれも哉とよハ涙らん
平長恒
老乃なかきこそひとしろひぬる
むかし志のいれつ述ところ
智蘊法師
玉ほ被草おひのこゝ涙そねなきまゝ
ことしもなかたすゝ涙ぬるゝ
宗祇法師

身にこそしむ老にそのまぬ春る風
うき世の中は行もかはらぬあはれ
権大僧都心敬
散らぬ花おひをねかふも得めかと
いのちにもいはやもむかし物かなひ
源友貞
花のまさ忌野のつ越のゆふか波
いはさしたなふをあけてあかへされ
従三位義敏

ひとたひはふれもおいそれたらぬつ越
神よろきこゆる身をはあはれめ
入道前右大臣
吉野野杉たてる身はおいて
末源にあけよる年をわすれ
道空法師
たまてぬこぬてひ花いりへらめや
なつこされたふなり月すむ
従一位敬忠

老の身にしもたのむかなきを
むかしおもちかきほとはまたえ
前大僧正義運

おいの身のこるともこゝろわすれなまし
うさ数ならぬをもひすてん
藤原俊通朝臣

夕暮はきゝぬたゝふ身はふりて
雲かゝむかしハみえしくもる
智蘊法師

うき身とてわかれしもなかるまて
わすれてもれハひとりそなく
素安法師

いかさらにいかにかはらん老の友
志らまてすくなきほとあけまし
神祇伯忠富

行こゑなをかりまおりけ老の身は
人ゆく袖はなほぬれさまそう
藤原継秀

世を見るに我たくらなるあはれともかし
くも哉事あたしみともおもひけれ
澄阿法師

おひぬるはあはれしるよの中に
あつめやすてんゆふくれのそら
よそ人もかし

あはれをもそへおもふねはかみ老て
まへりいてぬる新古いまたなる
権大納言公蔭

思ふとそおりふし月を見るのみに
まことそあはれ秋にもはしきそ
参議基綱

ゆふへのくもりしみそめたる庵に
内裏まそこきし集はいつとこそ
はし連歌はなかに
なき世乃中かくらゆゆらん
中院入道前内大臣

思所はいすなおもしろ三月雪

世試は浮ぬ乃と之へ宿の久行きて

権大納言公実

身こそハくちも木の本ハかハりけれ
見つる月よりもうはてものさき

前太政大臣

たゝよひて身をうきふしのかたみ川(瀬)(に)
あらこすむ世をおもひねる

宗祇法師

せめて身を人のうれへをこすもろ

こころをはけふの身のことはかり(字)

恵撰法師

人ことのうれへて杖やなからん
世中ハふしてはさかりの花乃け

宗長法師

たのむかなその身ハつ極ありつて
わすれてほしくあれし月

藤原雅経

忘なれてきみハをりしかてもかし

なりひとしれはみそかなりしき

藤原長能

志る事はなからしほとゝきすみな
かなしなくひとそまちたそねる

玄澄法師

たちかへるみは浦なみしたなふなかして
いかてかむつれみちをたつねん

權大納言高清

いつしひえぬこゝろの梅のはなかつはるかな

祢ためける秋をとりてあけぬる

御製

身もおりしおりひ出ていたせもかし
身の老をさてにたえぬ人もなし（年の）

三品親王

うきいのちこゝろかよわしれな
ちるはなさきみこそはなけれ

前右大臣

くけしふのさてゆきをいれちやまて

みたちこそん年ふるのかん

太政大臣

末乗乃松まゆはなかく

りのをおりても佐らきつゝ遊れ身

大蔵卿経蔵

かゝてふおしむかたなふれうきいのち

そのおもたせてわすつゝところんとや

法橋兼載

うきこ身ふもあはれなるさきを命なれ

なふを身れ履くそそれのこ詠まん

小野國繁

あらきいのちれにはしもろしめし

かまてうかはの杖のたもらけ

法眼尚順

あはもうしましも消なる身の紅紙

かさうかれあさなる花の姿をこそ

宗祇法師

かしたのつ遊子身をそなふ佐世

年端回文

拗躰

和調交到泰還否
暁鼓傳聲風自新
霞山雪闘春中臘
鬢髪華誇臘内春
歌兼詩好祝年題
我與鶯期約暖親
醒危三酌獨醒醉
盛世唐虞容此身

内觀明堂兼山叟